

氏名	うぶ かた ふみ かず 生 方 史 数
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学位記番号	農 博 第 1249 号
学位授与の日付	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	農学研究科森林科学専攻
学位論文題目	タイ東北部における農家林業の普及過程に関する研究

論文調査委員 (主 査)  
教授 渡 辺 弘 之 教授 岩 井 吉 彌 教授 大 畠 誠 一

### 論 文 内 容 の 要 旨

急速な森林減少を経験してきたタイでは、「ポスト熱帯林消失」の時代を迎え、近年農家林業が、東部や東北部を中心に急速に拡大してきている。この事例は、発展途上国における育成林業が、どのような条件のもとで勃興しつつあり、同時にどのような問題点を抱えているかを検討する上で興味深い。しかし、これがどのような要因により進んできたのか、特に、近年のタイにおける、経済成長に起因する急激な社会経済状況の変化が、農村にどのような影響を与え、農家林業の拡大にどのようにつながってきたのかについては不明な点が多い。

本論文では、最も主要な造林樹種の1つであるユーカリを中心に、森林政策・農業政策や関連産業に関する文献サーベイと、タイ東北部コーンケン県のパーサーン村・ゲンプラドゥー村、およびマハーサーラカム県のファナーカム村における農村調査の結果をもとに、農家林業の普及過程を、政府・企業及び農民の変化への対応から検証し、その役割及びそれぞれが抱えている問題点を検討することによって、育成林業が勃興した要因と、その進展を阻む阻害要因について考察した。

まず、第1章では研究の背景・目的と方法論について述べた。第2章では、農家林業拡大の政策的背景を分析した。その結果、2つの政策的背景—すなわち第一に、森林管理・再生の担い手が国家から民間企業へ、さらには地域住民へと変わり、彼らを担い手とした森林管理・造林活動が、森林保護・再生に重要な役割を占めるようになってきたこと、第二に、経済発展の中で農業が、外延的拡大から集約化・多角化・構造変化の時代を迎え、ユーカリなどの早生樹種が有望な「農作物」として推奨されるようになったこと—の存在が確認された。

第3章では、農家林業拡大の産業側の要因とともに、農家林の立地・ユーカリ農家林の収益性・在来樹種農家林の実態を検討した。産業側の要因としては、ユーカリに関しては、1980年代にパルプ産業が勃興し、1990年代に入って企業がその原料確保の戦略を、自社林直営から農民普及・契約造林に変えていったことが明らかになった。その結果ユーカリ農民造林は、1990年代に入ってから、主にパルプ産業の発展と並行して拡大を続けることになった。また、収益性に関しては、東北部では、競合作物であるキャッサバとの相対的収益性が、1990年代に入ってユーカリに有利になったことが明らかになった。一方、1990年代には、これまで目立った動きのなかった在来の長伐期樹種に関しても、農家林拡大の動きが認められた。

第4章では、ユーカリ農家林業を受容する住民(農民)側の反応に注目し、彼らが辿った社会経済の発展経路と農家林業の受容との関係を分析するとともに、経済危機後の農家林業をめぐる動向や、経営の発展を制約する内的・外的な要因についても検討した。その結果、第一に、調査地域の近年の農業発展は、土地節約的な要素代替過程、労働節約的な要素代替過程、および景気悪化後の過程の3段階に分けられること、第二に、ユーカリをめぐる住民の対応の相違は、そのうち2段階目の過程、すなわち経済成長によってもたらされた労賃の上昇・労働の機会費用上昇への農民の対応の差として表れたことが明らかになった。また、経済危機以降の動向としては、ユーカリ市場が買い手独占の傾向を強めており、生産者にとって厳しい状況が続いていること、そして、そのような中で調査地では、ユーカリ経営を止める農家と経営規模を拡大する農家の二極に分化するようになってきていることも明らかになった。今後この地域の農家林業は、産地や担い手の淘汰・再編へ

の道を辿っていくと考えられる。

第5章では、第4章までの分析結果を整理し、普及過程の全体像を提示するとともに、この事例が、熱帯諸国の育成林業の振興にどのような含意を持つかを考察した。この事例から指摘しうる重要な知見は、第一は、農家林業の拡大が、政府による普及政策や、企業による戦略転換、そしてキャッサバ価格の相対的下落への対応であっただけではなく、経済成長に起因する社会経済の変化に対する農民自身の自主的・合理的な対応の一つとなされてきたことであり、第二は、「住民による自給目的の森林管理」か「企業（国）による産業目的の林業」か、といった二元論的な対立の構図とは異なる「住民による産業目的の林業」というカテゴリーの重要性であり、第三は、農家林業の普及が、「社会林業」から「産業」への移行過程として捉えられ、両者を巡る問題の諸相が混在しているという現状認識である。

#### 論文審査の結果の要旨

急激な森林減少を経験してきたタイ、中でももっとも減少の著しかった東北部・東部で、農家によるユーカリの植林、いわゆる農家林業が急激に普及し、森林面積の回復・パルプ資源の供給に大きく貢献している。本論文はこのような農家林業がタイの急激な経済成長の中でどのような要因で進展したのが、またその農家造林の進展によって、逆に農村にどのような影響を与えたかを、タイ東北部コーンケン県およびマハーサーラーカーム県の2村を対象に、長期滞在し、農家林業の普及・発展過程を調査・検証し、政府・企業および農家の役割とそれぞれが抱えている問題点を明らかにしたものである。

成果として評価できる点は以下の通りである。

- 1 国家の森林政策の変更で森林の管理・再生の担い手が国家から民間企業に、さらには地域住民に移され、経済発展の中で急激な外延的拡大を示した農業が経済発展の減速により、集約化・多角化の時代を迎え、ユーカリをキャッサバなどに代わる有用な作物と認識することなどその枠組みの変化を明らかにした。
- 2 この地域に製紙工場が新設され、ユーカリ原木の確保を自社林直営から農家との契約造林に切り替えたことが大きな契機となっている。1990年代に入り、パルプ資源需要の拡大と平行して、ユーカリの植栽が急速な発展を遂げたが、とくに、この時点で競合作物であるキャッサバとの相対的収益性がユーカリの方に有利になったことを明らかにした。
- 3 急激な発展をとげた農家林業ではあるが、タイでの経済危機以降、ユーカリ需要が大きく落ち込み、買い手市場になり、生産農家にとってきびしい時代に入った。この事態の中で、ユーカリ造林を止める農家と逆に経営規模を拡大する農家とに分かれ、生産形態の再編に入っているなど、その実態を明らかにした。
- 4 森林再生に地域住民による産業目的の林業が可能であり、ここタイ東北部でのユーカリ農家林業も、社会林業から産業への発展の移行過程としてとらえ、その発展に関わる諸問題を総括し、明らかにしている。

以上のように、本論文はタイ東北部におけるユーカリを主とする農家林業の発展過程とそれに伴う農村の変化を長期の滞在調査から明らかにしたもので、その成果は熱帯林生態学・熱帯造林学に寄与し、また東南アジア地域研究、さらにはこの地域の林業発展にも貢献するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成14年2月19日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。